

山口県立美術館ニュース

天花

第10号

TENGE

昭和57年2月1日
発行山口県立美術館



雪 舟

「山水図巻(山水小巻)」

表紙 作品 解説

雪 舟

1420(応永27)~1506(永正3)

山水図巻(山水小巻)

紙本墨画 23.2×167.3(雪舟筆部分)

1474(文明6)年

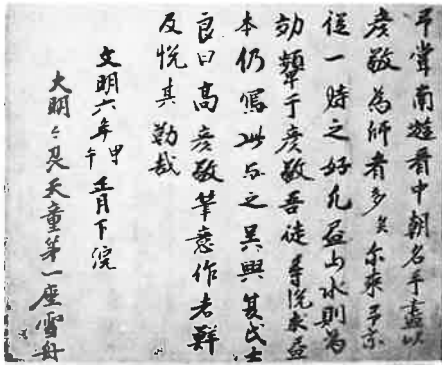
本巻は巻末に付随した跋文ぼつぶんによると、文明六年(一四七四)雪舟五五歳の筆になることが知られる。この時期は、雪舟が明から帰朝してまもなくの頃にあたり、そこで学んださまざまな絵画様式を自己の中で消化吸収していた時期であつたらうことは容易に推察される。本巻も高彦敬こうげんけいという中国画人の作風に倣つて描いたものであることが、前述の跋文によつてわかる。高彦敬(高克恭ともいう)は、宋代代末から元代初期にかけて活躍した画人で号を房山といい、米点などを用いた柔らかい味のある山水表現を得意としていたようである。本巻には雪舟自ら高彦敬の画風に倣つたといつているように雪舟独特の直線的な強固な樹木や岩の表現(防府毛利報公藏「四季山水図巻」にみられるそれらの表現は、その典型的なものである)はみうけられず、柔らかい丸味のある土坡が画面に淡墨で長く敷かれ、その上に点景として人物や茅屋、橋や帆船などが濃墨でリズムカルに配されている。のどかな漁村の風景が点景によつて右方から左方へゆつくりと移りかわつてゆくようにうまく構成されてい

るのである。このような横長の画面の構成は、南宋画院の画家夏珪の筆と伝えられる山水図巻などが規範となつたであろうといわれている。

なお本巻は江戸時代初期に二つに切断されたうちの前半の部分でありそれに付随している後半の部分は長谷川派の画人による写しである。(切断されたうちの後半の部分は明暦の大火で焼けたという。)

(当館学芸員 山本英男)

本巻末の跋文と画面(部分)



地方美術館として(一)

山口県立美術館長 河野 良輔

山口県立美術館も三度めの新春を迎えることができた。亀山公園の一角に本館が呱呱の声をあげたのは、昭和五四年の秋。そのころと比べると周辺環境もかなり変わった。県庁新庁舎が完成する昭和五九年ころには、このあたりはさらに変貌し、パークロードから県庁にいたるゾーンは、文化諸施設を擁する一大都市公園に生まれかわるといふ。文字どおり山口県都の新しい貌(かお)となることだろう。「地方の時代」とよばれる八〇年代、新しき酒は新しき皮袋に、美酒には新しい器が似つかわしい。

しかし、いかに環境が整えられても、それを楽しむ利用者とその利用に奉仕する人々がいなければ何の意味もない。都市公園然り、美術館然り。そこで、公共サービス機関に従う私どもは、県民の方々の積極的参加を期待するとともに、与えられた「器」をいかに内側から充実させるかに腐心する。だがその具体的実現

となると、対外的には地域のいわゆる文化的ニードとのギャップに悩まされるのが実情であり、内部的には羅針盤の針を時に狂わす認識や価値観の違いが交錯し、これではなかなか難しい。おりしも地方の主体性回復の旗印のもと「地方の時代」が叫ばれる今日である。この理念をいかに己れの命題として考え、生かしようか、館内外の諸問題を軸にすえじつくりそして正確に考えてみる必要があると思う。

一方国内を見わたすと、昭和三〇年代にはじまった地方美術館ブームは今日でも一向衰微の兆しを示すようにはみえない。だがこれも、美術館の一県一館、一都市一館の時代を迎える数年後には終息し、ブームは他に移っていくに違いない。ブーム去つて残るのは、戦後のベビーブームを想わせる大量の新設美術館である。美術館は、現にそうだが、これから一層過当競争の時代に入ると思われる。そこから予想されるのは、

たとえば自由競争が館相互の質をたかめる、といった必ずしも楽天的で好ましい面ばかりとは限らない。キヤリアのある美術館の館藏品貸出し制限、企画展趣旨の類似化やマンネリ化、コレクションの競合化といった事態は、近い将来必ず到来するといつていい。

つまり、地方美術館は足下からも周辺からも深刻な現実を抱えこみつつあり、いわば刻一刻と内憂外患の状況に足を踏み入れようとしているのである。新しい方向にむけ将来ヴィジョンの練りなおしが必要となつたということだろう。それには思いきつた発想転換が必要と思われる。一言でいえば、普及の哲学をもつということである。

これまで美術館は、意識すると否とに関わらず、信奉すべきいくつかの命題のもとに動いてきたと思う。「美術館はすぐれた美術品を鑑賞し味得する場である」あるいは「作品さえすぐれた質をそなえていれば、それはすべての人々を感動させる」といった命題である。前者は依然として真である。しかし後者の、いわばロマン派的命題は今日必ずしも成立しない。この命題は、もともと古典主義の美的価値観に抗するロマン

派の反語として一九世紀に現われた。それが当時の美意識の反転に大いに貢献したことは事実であろうし、また類似の発言は、晩年の芥川龍之介にもみられる。しかしロマン派にせよ芥川にせよ、彼らは美術作品とは体験されるべき美的現在であるとともに、了解されるべき特定の過去、特定の文化圏からのメッセージであるという美術作品の構造的二面性を、この字義どおりではなかつたにせよ知悉していただろうし、またそれを接する手だてとしていただろう。さらにこう明言した時彼らの観念に在つた「すべての人々」も多かれ少なかれ彼らと同様に学問や芸術を理解する環境の人々だつたと思われる。

つまり、そこにある「すべての人々」とは今日の大衆化社会ではほんの一握りの人々にすぎないのである。逆にいえば、この命題のもとで美術館運営を考えつづける限り、美術館は大衆化社会に即応した生きた機能を保ちえないのではないかと、ということである。そこに、現代において真に社会化されるために美術館はどうあるべきか、そのあり方を模索する前提があるように思われる。普及の哲学が望まれるゆえんである。

(以下次号につづく)

シリーズ

山口画人伝

(9)

桑重儀

1883(明治16)~1943(昭和18)

高田美規雄

大正元年(一九一三)一〇月、のち倉敷の大原美術館創設に画家として大きく貢献したことで名高い児島虎次郎は、約四年にわたる欧州留学を終えパリをあとにした。その児島の送別会には、小林萬吾や満谷國四郎をはじめ、滞仏遊学中の画家仲間が一四名ほど集まって彼の日本での健闘を祈ったが、その一人に本県出身の桑重儀一がいた。

しかし、桑重の場合は他の人々と少し事情を異にしていた。というのは、児島や小林らは東京美術学校の出身者で、次代を担う新しい世代と期待されていたの留学生であったのに対し、おそらく桑重は画壇の動きとは

別なところからアメリカに渡り、ここではじめて美術の道を志してカリフォルニア大学で絵画を専攻。のち欧州に転じて彼らと出会ったという経歴の持主だったからである。

明治一六年一月、山口県玖珂郡川下村(現岩国市)に桑重六助、タヨの長男として生まれた儀一の、アメリカ以前の事柄はほとんど知られていない。父は庄屋クラスの人物であったというから、長男の立場として、道楽とも考えられていた美術にストリートに入っていくことははばかられたかもしれない。結局大学に進んだ時期も早いものではなかったようである。欧州に移ったのが明治四四年(二八歳)といわれるので、渡米も早く明治三〇年代の後半——となれば、すでに二〇歳を過ぎた年齢ではあった。

同じころカリフォルニア大学に学んだ防府市在住の桂節郎氏によれば、当時アメリカに渡って働きながら勉強する人は美術畑に限らず多かったという。明治三〇年代に水彩画のブームをまきおこした三宅克己らもその一人であり、のちの国吉康雄の場合も同じだったのではないだろうか。さらに桂氏によれば、桑重は一期ほどの先輩(同氏は明治四一年の入学)

だったので親しかったが、彼がヨーロッパへ行ったのでそれまでの交際になつたらしい。このアメリカ経由ヨーロッパ行きというのも当時よくみられたパターンだったようだ。

桑重は、フランスに移ると官学派のジャン・ポール・ローランスに師事した。かつて多くの日本の画家が、それも明治美術会(太平洋画会)系の人々が学んだのも歴史画を得意としたといわれるこのローランスのもとであった。とはいえ、アメリカから来た彼にとつて、そのことは偶然のなりゆきだったにすぎない。しかし結果的には、日本へ帰ってからの桑重の立場は、そうした事情と無関係ではいられなかったのである。彼がより新しいフランスの美術動向に大きく心を動かされたならば事情は違っていたかもしれない。しかし、アメリカのそしてフランスの、いわば歴史的な厚みをもったトータルな美術状況のなかで古典的な表現を学ぼうとしていた彼は、日本の洋画が異常な早さで特異な展開をたどっていたことに対して理解が及ばなかった。明治二〇年代の平明なリアリズムから、日本的な日常性に関心が向けられた四〇年前後期、さらに浪漫的な甘美さと抒情性をそなえた様式

性へと変わっていったその流れについてである。その意味で、本質的に西欧的な古典主義精神については、十分な理解がえられないまま日本の洋画は先へ先へと進み、大正の初めには、より極端な私たちの後期印象主義的な作風がとり入れられるまでになっていた。

大正二年に帰国し、東京に居を構えた桑重も、そのようなギャップを背負ったために画壇へのデビューが遅れ、七年後の第二回帝国美術院展(文部省主催美術展覧会の事実上の後身)が彼のスタートであった。じきに四〇歳に手が届こうという年齢であり、同年代で友人でもあった美校出身の金山平三は、すでに審査員クラスにまでなっていたのである。翌々年の第四回帝展へ出品した桑重の作品に触れて、美術評論家の仲田勝之助は次のように述べる。

「桑重儀一氏の『畫室に立てる女』コンベンショナルな見方で硬いが眞摯な裸體習作としては捨てたものではない。此種のものを一概に排するのにはよくない。」(『中央美術』八六号) ここでも彼の立場は明確であろう。すなわち、伝統的なモチーフと主観性を抑えた堅実な表現。一方に、それを生硬として高くは評価しない画

壇の傾向が批判されているわけだが、逆の立場からすれば、この作品には筆触やデフォルメ感覚に新鮮さが欠ける点で特に優れたものとはいえない、ということになるのだろうか。

しかし桑重にも、どのように作品を仕上げれば通りがよいかを理解されるようになる。それは、ある意味では日本的な油絵を描くことへの進路変更であり、元来そうした考えのなかった本人にとっては容易に踏み込める地平でもなかったであろう。それだけにその歩みは遅々としたものになった。

昭和六年、帝展の無鑑査に推されたことは、それまでの努力の成果に違いない。こうして画壇の中堅としての地位も築いたと確認するころ、桑重は翌七年八月から一年余の第二回渡欧を行なっている。パリを中心にヨーロッパ各地を巡り、帰路はアメリカ経由であったというこの旅行は、じっくり腰を落着けての研修旅

行というより、新しい西欧の風を一杯に呼吸して、自由な境地から別の一步を踏み出そうとするもののようにみえた。

ようやく新しい出発をむかえようとした矢先、画壇は昭和一〇年のいわゆる松田改組で大きく動揺する。この改組の目的は、存野諸団体や新旧両派をふくむ総合的な展覧会として帝展を再生させようというところであった。しかし存野諸団体の反発はもろろんのこと、日本画や彫刻の新旧両派の確執の根は深く、さらに問題を大きくしたことは、旧帝展無鑑査クラスの解消問題があった。新しい基準で会の委員を選び出し、新幹部構想を示したため、いわば準幹部として待機組だった無鑑査クラスの作家たちに、参与とか指定の名義で大なたが振られたのである。彼らには大いに不満の色をあらわし、ただちに第二部会（帝展では洋画部門を一部と称した）、第三部会（彫刻）

が結成され、帝展不出品が旗印となった。結局この動きは、展覧会の主催を文部省に復帰させ、鑑査展と招待展の二本立ての構成にして後者の幅に余裕をもたせることで一段落したのである。

桑重は二部会に加わり、招待作家となることでのち新文展に復帰した一人であったが、これを機に出品をしなくなった作家もあり、この事件は、旧帝展系在野系の作家たちにさまざまな波紋を拡げている。

ところで、第二回の渡欧は、表現の上で桑重をかなり自由な境地へ導いたようだ。筆捌きもこだわりのないスムーズな動きを感じさせ、色彩もより豊かなものとなり、特に女性像には甘美な抒情性が盛り込まれるようになる。たとえば、新文展の第一回展に出品された「カナリヤ」では、洋装の婦人が長椅子の上で寛ぎながらペットのカナリアを指に乗せている。黒っぽいバックにクリーム

色の長椅子。女性の優美な姿態を包む黒いシースルーのワンピースに、アクセントとしての赤いクッション。こうした道具だてや柔らかな描線は、初期の作品とはるかに隔った地平に移った桑重の姿勢を示すものである。

彼の歩んできた道は特殊であるとはいえないが、逆に順風満帆では決してなかった。こうして昭和一八年五月、病を得て斃れ六〇歳の生涯を閉じた桑重であるが、彼を通じて、洋画の日本における近代化とは何であったのかを改めて考えてみなければならぬように思われるのである。

（当館学芸員）
執筆にあたり、桑重豊子、桂節郎両氏の教示を得ましたので、記して感謝の意を表します。



▲肖像



▲裸婦 (1913)



▲画室に立てる女 (1922)

▼カナリヤ (1937)



美術エッセイ 中国の博物館周遊

—その(二)—

南京・揚州・蘇州・上海

勝津吉生

中国民航のジェット機にのり、北京を飛びたてば、南京までは二時間ほどである。眼下の黄砂の舞う原野はしだいに雲海へとのみこまれていき、やがて南京上空へ近づくと、機は徐々に横たわる雲の中へと沈んでいった。窓を覆った雲がきれはじめ地上の景色が視野にはいつてくるにしたがい、私は思わず身をのりだしてしまった。足下に広がる光景は、まさに中国山水画にみる江南の景であった。揚子江を本流とした幾つもの小さな支流が走り、その支流を囲むのは山というよりは、なだらかな起伏をもった丘陵であり、雲間から

わずかにさし込む陽光がそれらの丘壑にかかった霞によって、微妙に柔らぎ、いかにも温潤な雰囲気を帯わせているのである。それらはまさに董源や巨然の描く抒情にあふれた眺望を私の頭の中へ蘇えらせてくれた。

南京は北京、西安(旧長安)と肩をならべる古都であり、現在でも江南地方の中心的存在である。長江(揚子江)に面している北を除く三方は、丘陵に囲まれ、古来より天然の要害として重要な拠点となっていた。訪れた南京博物院は、この南京市の東部、明代の南京城の東端にあたる中山門の近くに位置している。一九三三年に創設された中央博物院準備処を前身とし、一九五〇年に発足したそうである。その間大戦中には大きな損傷をうけ、また国民党政府が台湾へ移る際には、その収蔵品のほとんどが持ち出され壊滅的な打撃を蒙った。しかしその後新たな考古関係の出土や、一般からの収集により、現在では数万点の収蔵品をかぞえるに至っている。

ちょうど友好都市である名古屋で「南京博物院展」が開かれていた時であり、院長をはじめとした多くのスタッフは不在であったが、その留守をあずかる戴さんにいろいろ話を伺った。彼女は特に普及教育を担当しており、展示品の解説をその主な業務としている。聞くところによるとこうした解説担当の職員がここには一〜二名おり、団体の見学者の多いこの博物院では欠かすことのできない存在になっているらしい。入館者のおよそ三分の二が学生というのも文教都市である南京の特色をよく示している。また各学校と博物院との連絡が密であり、その見学のスケジュールの調整に苦労することもしばしばということであり、このことからでも学校教育の中へ博物館活動が十分に浸透していることが知られた。

どしゃぶりの雨の中を南京から揚州まではバスでの移動であった。揚州は特に日本とはゆかりの深い土地である。奈良時代に日本へ渡り、律宗を伝えた鑑真和尚ゆかりの大明寺のある地である。この寺は乾隆時代に法浄寺と改名されたが、日本との国交も回復し、その観光客も多く訪れるようになり、最近以前の大明寺という呼称が復活したそうである。特に一九七三年には鑑真記念堂が建てられ、一九八〇年四月に唐招提寺の国宝「鑑真和上像」が中国に里帰りした際、ここでも一週間ほど展示され、およそ二〇万人の観客を集めたとのことである。



写真1 揚州博物館の入口

者や芸術家を庇護したために江南における文化の中心地をなしていた。

「揚州八怪」というのは、この地に僑寓し、個性にあふれた画風をもつたボヘミアン的な一群の画家の総称である。その飄逸な画風は日本でも好まれ、多くの作品が現存している。わずかな展示スペースではあったが、およそ二〇〜三〇点の作品が展示され、乾隆期に風流の地揚州に花ひらいた生気に満ちた水墨芸術を堪能することができ、実のところこの博物館の存在を訪れるまで知らなかった私にとって思わぬ拾いものをした気分であった。

揚州から蘇州への移動はバラエティーに富んだものであった。バスで揚子江沿岸の瓜洲埠頭まで行き、フェリーで対岸の鎮江まで渡るのである。広大な長江（揚子江）の流れの中にあって、古来幾多の苦難を乗り越えて渡ってきた日本の学問僧たちが、希望に胸ふくらませてこの同じ流れを溯ったのかと思うとなんともしえぬ感興が湧きあがってきた。

鎮江に近づくにつれ、行く手に小丘の上に立つ層塔が視野に入ってきた。どこかで見たような光景なのでガイドに尋ねてみると、まさしくそれが金山寺であった。雪舟がその「唐

土勝景図巻」の中で描いたものであり、南朝梁代以降の巨刹として日本の五山の学僧も多く遊学した寺である。鎮江では蘇州行きの列車を待つ二時間の昼食休憩だけであり、金山寺の見学は行程に含まれていなかった。昼食抜きを覚悟して、ホテル（金山飯店）でタクシーをさがしたが、運悪く出払っており、今度は有志をつのり食事を終えたバスの運転手にガイドを通じてせめて金山寺のふもとまでと懇願したが、休憩時間というのであっさり断わられてしまった。とにかく金山寺を眼前にして痛恨のうちに列車へ乗りこまざるをえなかった。

列車は常州、無錫を過ぎて景勝の地蘇州へ到着した。蘇州は明代から清代中期にかけては中国一の都会であり、その高い文化水準を誇っていた。また「園林」とよばれる多くのすぐれた庭園があることでも有名である。私たちが蘇州博物館を訪れた時は、「泥人陶俑」の特別展示が催されていた。漢代の陶俑からはじまり、現在でもこの地方の民間手工芸品として名高い恵山泥人形までの流れを展示したなかなかユニークなものであった。この館の常設展示の大きな特色は蘇州文廟内に残っていた

宋代の石刻碑と宋錦などとして知られる蘇州の歴代の織物の展示室である。年間の入場者が四〇〜五〇万人ということであり、その数にも驚かされる。中国の博物館をまわって気づくことは、どこでも平日にもかかわらず見学者が非常に多いことである。入場料の安さもあるだろうが、博物館が一般の人々にとってより身近なものである証拠であろう。

蘇州から上海までは列車で一時間ほどである。上海博物館の見学も実質二時間ほどであり、まことにあわただしいものであった。この館は一九三四年に建った銀行を改築し、一九五二年に開館したそうである。そのため各展示室の間取りも悪く、窓からのひざしが展示物に直接あたる



写真2 上海博物館との懇談会

箇所も多い。展示形式は一階が青銅器陳列、二階が陶器陳列、三階が絵画陳列となっている。展示品にも西周時代の大克鼎や孫位の「竹林七賢図巻」、郭熙の「幽谷図」など著名なものが多い。しかし古画名品も明以前のものはほとんど全てが複製展示であり、いささか落胆させられたが、作品保存の立場からは当然で、やむをえないことである。これらの作品は年間二回、二週間ほど展示されることである。見学後の懇談会には黄館長も出席され、活発な質問が交された。(写真2)この館では陳列研究などの他に文物復制部や科学実験部などを設け、作品保存法の分析、青銅器、陶器の復原、絵画の修復や表装も行っているそうである。また常設の他に年間五〜六回の特別展示を催し積極的な活動を行っている。

今回の旅行は、博物館見学が目的であったわけだが、スケジュールの調整のため、その見学時間が極端に短縮されたりし、充分満足はゆく内容とは言い難いものであった。しかし中国の博物館事情をかい間みることはできたようであるし、これを第一段階としてまたいつの日か再び見学する機会をもちたいものである。

(当館学芸員)

美術館から

常設展示案内

本館の常設展示室では、テーマを設定した展示をおこなっています。今後の予定は次のとおりです。なお第二常設展示室は、二月一日日まで「円山派と森寛齋―応挙から寛齋へ―」に使用し、その後作品撤去および会場復元作業のため、二月二日まで休ませていただき、二月三日より再開させていただきます。

◎第一常設展示室

●絵画展示室（香月泰男）

シベリア・シリーズとその前史(3) シベリア・シリーズと昨年寄託をうけた一九四〇年代の作品を中心に、香月の中期から後期にかけての作風展開をみる。

●絵画展示室（小林和作）

小林和作の軌跡 油彩は寄託作品の風景画を中心に展示し、水彩画、あるいは初期のころ学んだ日本画をふくめて、小林芸術の軌跡をあとづける。

●郷土工芸室

萩焼と赤間硯 館蔵の萩焼と赤間硯を、現代作家をふくめて体系的に展示する。

◎第二常設展示室

山口県近代日本画の流れ 明治以降活躍した山口県出身日本画家の作品を、物故者に限定して展示する。明治初期の東京・京都それぞれの画壇の中心的存在であった狩野芳崖や森寛齋、その後官展を中心に活躍した高島北海や松林桂月など。

洋画にみる人間像 館蔵品より、

とくに人物表現を題材としてあつかったものを展示する。永地秀太、桑重儀一、桂ゆき、小林和作、香月泰男など。

編集後記

「天花」一〇号をおとどけします。今回は都合により減ページとなり、伝統の構造は休ませて頂きました。ご了承ください。なお伝統の構造これからの予定は、次回第一号で、三回にわたってご愛読いただいた嶋田日出夫さんの「デュッセルドルフ通信」を終わり、一、二号からしばらく大内塗をとりあげる予定です。

昨年府府天満宮が、所蔵の大内義隆奉納松藤文様蒔絵文台・硯箱の重

文指定を記念して「大内塗今昔」展をひらいたのは、大内塗を再認識する試みとして記憶に新しい。伝世品を現代につなぐ山口漆工芸史のアウトラインを紹介する、出品数二三点の小規模展観でしたが、とりわけ先述の指定品をふくむ「大内塗」について認識を新らたにしてくれたことは意義深いものがありました。次号からの特集が大内塗再考のいとぐちになることを願っています。

ところで、美術館ニュース「天花」は今後もこのシリーズを利用し、このような伝統に関わる諸テーマをとりあげることになっています。とりあげるべきテーマについてご希望、ご意見がありましたらご一報ください。

伝統の構造について、研究ノートも第七号以来休載していますが、これも次回から復活します。

最後に森寛齋展は、お蔭で好評裡に閉幕しました。開館記念展として狩野芳崖にとりくみ、いままた森寛齋をとおして、幕末から明治前期にかけての日本画壇について考える機会をえたわけですが、時代としての一過性の問題としてでなく、現代のわれわれの問題として、たとえば写実性と様式性について考える機会に

もなったのではないのでしょうか。新春の企画展は雪がつきものと相場がきまっています、このシーズンは遠来の客脚の伸び悩みに心痛するのが担当学芸員のみならず館職員全体の常。企画展は対象となる作家や作品が主人公であるとはいえず、それを企画構成する担当学芸員にとってはこれもひとつの「作品」です。労作にせよ力作にせよ作品である以上、より多くの人に見て頂きたいと念ずるのは人情。全精力をつぎこんだ結果に何らかの反応がかえってくる。これも「男子の本懐」に違いありません。ところでこの企画展をもって今年度の大型企画展は打ちどめです。次年度も、新たな問題意識をふまえた展覧会を準備しています。ご期待ください。(Y生)

山口県立美術館ニュース

「天花」

第一〇号

昭和五七年二月一日発行
発行 山口県立美術館

〒753 山口市亀山三一一

☎〇八五一一五―七七八八

印刷 瞬報社写真印刷株式会社